

2020 年度

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2770103295		
法人名	社会医療法人 生長会		
事業所名	ベルアモールハウス(チューリップ)		
サービス種類	認知症対応型グループホーム		
所在地	大阪府堺市中区深井畑山町211番地		
自己評価作成日	令和2年8月1日	評価結果市町村受理日	令和2年11月11日

【事業所基本情報】(介護サービスの情報公表制度の基本情報リンク先URLを記入)

https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/27/index.php?action=kouhyou_detail_022_kani=true&JigyosyoCd=2770103295-00&ServiceCd=320

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 介護保険市民オンブズマン機構大阪
所在地	大阪府大阪市東成区中道3-2-34(JAM森の宮事務所2F)
訪問調査日	2020年9月15日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

1ユニット9名で個々の特性を十分に把握し、個人に寄り添った質の高いケアを行っていただけるよう支援に力を入れている。また、一日一回は入居者全員が外に出て、季節を肌で感じることができるよう支援していること。家事作業では、職員と共に入居者が何らかの形で参加できるように努めていること。他に、認知症やADLが重度の方にもできることはなるべく自己で行なえるよう支援し、認知症の進行を穏やかにしている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

長年地域に貢献してきた医療法人が運営するグループホームです。「愛の医療と福祉の実現」を使命として掲げ、併設する介護老人保健施設、訪問、通所サービス、協力病院と密接な連携を図り、看取りにも取り組んでいます。「究極の個別ケア」を目指し、利用者一人ひとりに具体的に細やかな介護計画を作成し、更新時には、家族、医師、看護師、理学療法士、支援相談員等、専門職を交えた総合カンファレンスを行い支援の充実を図っています。新型コロナウイルス感染予防のため、外出制限で不自由な生活の中、利用者全員が1日1回は外に出て季節や気候を感じてもらい、敷地内や屋上での散策に努めています。管理者は医師で、職員のケアに対する意識が高く、責任者を始め複数の職員が認知症実践リーダー研修を受講し、認知症に関する質の高いケアで利用者の日々を支えています。また、医療との連携は、利用者・家族の大きな信頼と安心感に繋がっています。管理者が「うちの自慢は、自分の仕事をどうするか考えることができる職員」と、職員の頑張りを承認する職場環境は、職員の士気を高め定着率の高さに表れています。職員の利用者を大切に思う気持ちが、居心地のよい雰囲気を作っているグループホームです。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓ 該当するものに○印		項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓ 該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

〔セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー) です。〕

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	法人の「地域と職員と共に栄えるチーム」という理念をもとにベルアモールハウス独自の理念「地域・家族様と共に支えるケアを実現します」「パートナーの尊厳を守ります」を作り上げた。この理念を念頭に置き日々のケアを実践している。	「地域と職員と共に支えるチーム」の法人理念の下、「地域・家族様と共に支えるケアを実施します」「パートナーの尊厳を守ります」をグループホームの理念に掲げ、実践しています。理念は玄関に掲示しています。具体的なケアについて話し合う中で、理念を原点として共有し、活かしています。	今後は、理念に沿ってユニット毎または年度ごと等に目標を立て、さらなる理念の実践に繋げてはいかがでしょうか。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	毎日施設周辺を散歩し、その機会に地域の方々との会話を楽しまれている。また、1週間に1回地域のスーパーへ買い物に行ったり、2ヶ月に1回、近隣の老人会の方々との詩吟交流会や、保育園児との交流、ふれあい喫茶にも積極的に参加している。また、納涼祭では多数のボランティア・学生も来られている。他に認知症カフェとして「アモールカフェ」を開催し、地域住民との交流を図っている。現在はコロナウイルスの感染拡大の予防対策として実施していない。	理念の「地域と共に」の通り、開設時から地域との交流は、積極的に実施しています。新型コロナウイルス感染予防のため、現在は地域の行事はほぼ中止になっていますが、これまで様々な取り組みを行ってきました。自治会公民館でのふれあい喫茶、自治会の盆踊り、地藏盆への参加、保育園児との交流、周辺道路の清掃等。併設の老人保健施設と合同の納涼祭では、大勢の学生や地域のボランティアより協力を得て、利用者・家族に楽しんでもらいました。コロナウイルスの終息が見えない中、地域との関係継続の工夫を模索しています。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	認知症カフェの実施、堺市見守りネットワーク見守り協力事業所や堺市まちかどAED設置施設へ協力している。また高校生や保育園児との世代間交流を行ったり、看護と介護の実習生を受け入れている。他に高校生の介護体験も受け入れ、高齢者介護について理解を深める場を提供している。現在はコロナウイルスの感染拡大の予防対策として実施していない。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議の結果を全職員に報告書を回覧し、サービスの質の向上に繋げているが、本年3月～6月はコロナウイルスの感染予防対策として実施していない。	自治会長、民生委員、ボランティア、地域包括支援センター職員、他グループホーム職員等の参加で会議を開催しています。会議では主に、ホームの状況、利用者の様子、行事等の報告を行い、参加者から評価や助言を得て、ホームの運営に活かしています。	会議室での開催の他、利用者の生活状況がより伝わるリビングでの開催も検討されたいかがでしょうか。また、会議は報告中心になりがちですが、ホームが抱えている問題も開示し、より開かれた運営推進会議にしていけたらいかがでしょうか。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	堺市中区認知症支援部会に参加し、また運営推進会議には、地域包括支援センターの職員に参加してもらいホームの様子を伝えていたが、現在はコロナウイルスの感染予防対策として実施していない。	市関係部署の担当者とは、いつでも相談できる関係が築けています。市と協力して「認知症サポーター養成講座」を開催し、認知症の啓発活動に携わっています。区内のグループホーム連絡会にも参加し、情報交換を行っています。高校生の体験学習も受け入れています。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	日々の支援のなかで、身体拘束をしていないかを職員同士で確認しあっている。また、入居者一人ひとりの行動や思いを把握するよう努めている。家族には入居時に玄関とベランダを解錠することを説明して承諾してもらっている。しかし、2名の入居者のみ、家族が外に出て行くことを心配して、ベランダの鍵の解錠はできていない。現在はコロナウイルスの感染予防対策として開錠していない。	「身体的拘束適正化のための指針」を作成し、身体拘束をしない支援を実践しています。また、身体拘束や虐待に関する研修を実施し、職員で個人の尊厳を守るケアの確認を行っています。現在、コロナウイルスの感染予防対策として、各ユニットの玄関は施錠していますが、外気にふれる自由な暮らし作りの支援に努めています。責任者は、職員のストレスにも配慮し、何でも言える雰囲気大切にしています。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	法令遵守委員が会議に月1回参加し、職員に対し、事例を用いて伝達講習を行っている。また、日頃の介護において、ストレスがたまらない様、職員同士で連携して介護に当たるよう心がけている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	2019年度は主治医が精神科の医師で、精神保健指定医であり、支援できる体制は整っている。今年度主治医変更に伴い研修参加検討中		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約する前には、見学に来ていただき、家族様・入居者様の質問や不安にもしっかりとお答えすることで、理解され納得した上で契約して頂いている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	2019年度は12月に家族交流会を開催した。会の際には家族同士の交流を深めると共に、ホームへの意見を聞くようにしている。また、2ヶ月に1回の運営推進会議には家族様にも参加してもらい、その内容を全職員に報告している。 玄関には「ご意見箱」を設置している。	家族の面会時には、その都度声掛けして、利用者の状況を報告し、要望や意見を聞くようにしています。家族の代表には運営推進会議で意見を聞いています。家族交流会にはたくさんの家族の参加があり、意見や要望を聞く機会になっています。ホーム長や職員は、利用者や家族との信頼関係を築くことで、率直な意見や要望を出してもらえと考え、コミュニケーションに努めています。家族からの意見は、真摯に受けとめ、サービスの改善に活かしています。利用者の生活が伝わる、写真を多く入れた機関誌を発行し、通信欄には、利用者一人ひとりの様子を記載し、家族に喜ばれています。 現在、コロナウイルス感染対策として、リモート面会を余儀なくされていますが、利用者・家族に安心してもらえる工夫を検討中です。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月1回カンファレンスノートを用いてユニット会議を開催し、職員の気づきやアイデアを話し合い、運営に取り入れるようにしている。また、職員一人ひとりの思いや意見などはフィードバック面接時や都度聞くようにしている。	毎月ユニット会議を開催し、サービス向上に向けて話し合っています。責任者は、職員が日常的に意見を出しやすい雰囲気作りを心がけ、コミュニケーションを大切にしています。年2回、責任者との個別面談を実施し、意見や思いを聞く機会を設けています。今年度は、援護長による全職員の個別面談を実施し、日頃の思いを聞くことができました。管理者が頑張り承認する職場環境は、職員の士気を高めています。また、堺市から「働きやすく魅力あふれる事業所」と評価を受け表彰されたことで、更に活き活き働ける職場となっています。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職員一人ひとりの家庭事情や希望を把握して、働きやすい環境を整えるよう努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	年間計画として、ユニット会議を利用して、勉強会や各委員会での伝達講習を実施している。他にアモール全体で取り組んでいるQC活動にも積極的に取り組んでいる。また日々の入居者様への関わりを学会で発表したり、法人で実施しているキャリアラダー研修に参加していたが、現在はコロナウイルスの感染予防対策として実施していない。また堺市働きやすい事業所表彰へ応募し、2年連続表彰を受けている。内本年度は1名きらめき職員も受賞した。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	堺市中区のグループホーム連絡会や認知症支援部会に参加して、情報の交換を行っていたが、現在はコロナウイルスの感染予防対策として実施していない。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前には、家族・入居者に施設見学をしてもらい、納得した上で選んで頂いている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	見学の段階から、家族の状況やどのようなことに困っているかを聞き、その上でグループホームではどんな支援が出来るかを説明している。サービス導入時にはさらに詳細な要望を聞いて、対応を伝え信頼関係を築くよう努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	安心して利用してもらえるよう前サービスの担当者から情報を聞き、本人の状態や家族の状況も理解するよう取り組んでいる。また、どのように生活したいか、何が好きなか等聞き、本人の希望に沿った支援をすることで安心した生活を送っていただいている。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	職員は本人と食事や家事作業を共にし、喜怒哀楽を共有することで信頼関係を築いている。入居者とは、認知症の進行や、自分の思いを伝えられない苦痛に対して、寄り添い支え合う関係を築いている。また、職員との交換日記をすることで過去の話や思い出について聞いている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族の状況も把握しながら、連絡を密にして、細かく様子を伝えるようにし、共に本人を支えていくことができるよう家族との信頼関係を築いている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	散歩時に併設の通所リハビリセンターの職員や利用者、リハビリ職員、また事務所で新聞をもらう際事務の職員とも交流を持たれている。交流時は「元気や。会えて嬉しかった」など話され、表情も明るい。	職員は、これまでの馴染みの関係を少しでも継続することが利用者に大切なことと理解し、支援に努めています。入居前の近所の友達が訪問したり、馴染みの美容院、墓参りに行く利用者もいます。併設のデイケアに通う、顔なじみの人に会えるのを楽しみにしている利用者もいます。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	リハビリ体操や歌、散歩など、入居者同士の交流の場面を設けている。また、他者との関わりが困難な入居者には、職員が間に入り孤立しないよう支援している。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	2020年4月1日より1ユニット9人の体制に変更となり、そのため併設の老健ベルアモールや他施設へ行かれ3名退居された。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日頃からコミュニケーションの機会を多くもち、その中で希望や思いなどを聞き出している。また、意向の把握が困難な入居者の場合には、本人の表情などを観察すると共に、家族から意向を聞き、それらをカンファレンスやユニット会議で共有し、課題を検討してケアプランに反映させている。	入居時に「私の望みシート」を家族に記入してもらっています。「私の信頼する人」「私が好むこと・大切にしていること」「長年馴染んだ生活の好み」等、細かに聞き取り、職員は情報を共有して支援にあたっています。日常のケアのなかでの気づきや発見は、申し送りに記録し、介護計画に活かしています。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居前には、生活の場を訪問して、暮らし方や生活環境の把握に努めている。また、入居時には「介護に関する意向書」「私の望みシート」を家族に記入してもらい、情報を得るようにしている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	食事作り、洗濯物干しや片付け等の家事作業を通して、できること、できないことを適切に把握するように努めている。また、気持ちや体調の変化を見逃さないために、関わりを多くもつようにしている。入浴や排泄の機会に身体の状態も把握している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイディアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	ケアプランは3ヶ月ごとに更新している。更新前には、カンファレンスを開催し、家族、医師、看護師、作業療法士、支援相談員、ホーム職員が参加し、本人がより良く暮らすための話し合いをし、そこで得た意見をケアプランに反映させている。またカンファレンスに参加しない職員にも伝達し、情報の共有に努めている。モニタリングは、週間評価と月間評価を行い、入居者の状況に変化があれば、その都度プランの変更を検討している。また、ケアプランの更新時には、家族に面会及び電話にて確認し、同意・了承を得ている。	「究極の個別ケア」実現のための介護計画となっています。介護計画作成時には、利用者・家族の希望を細やかに聴き取り、作成しています。基本は3ヶ月に1回見直します。更新時には、家族、医師、看護師、理学療法士、支援相談員等、専門職を交えた総合カンファレンスを行い支援の充実を図っています。ケアプラン実施表には、利用者一人ひとりのケア内容が記載され、介護計画に沿った支援が実施できるように工夫されています。計画作成担当者は計画作成にあたり、「一人で作るのではなく、職員全員で関わる計画」を心がけています。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	チェック用紙やホワイトボード、情報共有用紙、ほのぼの「申し送り」を活用し、全職員が目を通して確認後チェックをしている。これらの日常の記録や情報、カンファレンスでの意見をケアプランに反映させている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	歩行が不安定で車椅子や歩行器が必要な入居者に対して、老健のPT、OTのアドバイスにより安全な移動、移乗の支援に努めている。また、本人・家族の状況に応じて、通院や送迎など必要な支援は柔軟に対応している。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	書道・詩吟などボランティアの協力を得て、充実した生活を送ってもらえるよう支援している。近隣の高校の職場体験、介護学生の実習生を受け入れることにより、異世代間の交流を支援している。消防避難訓練の際には、入居者の安全を確保しながら、共に行っている。他に、地域のふれあい喫茶にも参加させてもらっている。現在はコロナウイルスの感染拡大防止のため実施していない。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	主治医については訪問診療の医師、または入居前からのかかりつけ医を本人・家族の希望を尊重し選択してもらっている。家族が病院受診に付き添えない場合には、職員が付き添って事後報告をしている。歯科は併設の老健が提携している歯科または家族の希望する歯科の治療を受けている。	入居前のかかりつけ医への受診は、希望があれば可能です。現在、入居前のかかりつけ医に受診している利用者も複数人います。かかりつけ医への診察については家族の付き添いを基本として、無理な時には職員が同行して対応しています。ホーム管理者は医師で、看護師も配置しています。利用者の状態に沿って24時間365日、迅速に適切な医療が受けられるよう医療連携体制を整備しています。医療連携の充実、利用者・家族の安心に繋がっています。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	併設の老健ベルアモールと医療連携体制の契約を結んでいる。また看護師が在籍しており、ホーム職員と共に、日常の健康管理の支援をしている。定期的な健康チェックや緊急時には必要な助言を受けている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入居者の入院中には、ホーム職員が面会に行き、安心して治療が受けられるように本人や家族に声をかけている。入院先の医療チームとの連携を図り、適切な療養ができ、早期に退院できるよう支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	「重度化・看取り支援に関する意向書」「医療に関する意向確認書」を全入居者のキーパーソンに配布し、重度化や終末期の治療に関しての要望を聞いている。本人や家族の意向に沿った支援が出来るよう、主治医、看護師、家族、ホーム職員がチームとなって、今後の変化に備えて検討や準備を行っている。状態が変わるごとに「意向書」の要望に変更はないかを確認するとともに、小さな変化も報告している。また、医師、看護師にも密に連絡をとり、職員も統一したケアができるよう話し合いの場を持っている。	入所前に重度化や終末期の説明を行い、意向確認をしています。ホームでの看取りを希望される家族も多く、今年も4名の看取りをすでに行いました。状態が変化するたびに家族への報告を密に行い、意向に変わりはないか家族に寄り添い話し合いを重ね、確認をしています。看取り後100日ほど過ぎたころに家族へアンケートを行い、看取り後の職員の想いや気づきも含め次のステップアップに繋げています。重度化に備え「最後まで食べるためにはどうすればよいのか」をテーマに看取りに関して嚥下等の勉強を何度も繰り返し学び、どの職員も同じように実践できるように取り組んでいます。緊急時には隣接する老健にスタットコール(緊急呼び出し)を行い専門職につなぐことで職員や家族の安心を得ることができています。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	入居者の急変や事故が発生した時は、老健と申し合わせた緊急対応「スタットコール」を全職員の統一事項にしている。また、ホーム内での緊急時の対応マニュアルを作成し、全職員に周知している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	2019年度はホーム全体の避難訓練を1回実施した。また、併設の老健との合同の訓練は消防署の協力のもと7月と11月の2回実施できている。今年度は8月実施予定。	今年も隣接する老人保健施設と合同で年2回避難訓練を行いました。避難訓練を通して、災害時に利用者が不穏になった時の対応や車いすの準備等反省点がみつきり、今後に繋げることができました。災害時の備蓄は併設施設と一緒に管理しています。ホーム内の各階段の高さが低めに作られているので日頃からリハビリを兼ねて階段を使用し、災害時の避難に備えることができています。	

自己 外部	項 目	自己評価	外部評価		
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
Ⅳ. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	援助が必要なときには、本人の意思を尊重しながら、さりげない声かけをしている。特に排泄に誘導する場合などは、周りに聞こえないよう、またプライドを傷つけないよう声をかけ支援している。	「パートナーの尊厳を守ります」を理念に掲げ、利用者一人ひとりを尊重する支援を行っています。接遇研修も実施しています。日常のケアでは、誇りやプライバシーに配慮し、「トイレ」という言葉を好まない利用者には、「部屋で休みましょうか」また単に「行こう」と誘い、途中で排泄介助に繋がります。早朝の5時にうまく声をかけることで着替えや清潔を維持している利用者もいます。一人ひとりにあったその人だけの個別ケアを実践しています。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	本人の言動や表情から思いを汲み取り、納得しながら生活できるよう支援している。不安などがある場合は時間をかけてゆっくりと話を聞くようにしている。また、外出を希望される時には、職員と一緒に散歩へいくことで気分転換を図っている。様々な場面において、職員は「どうしますか」「どちらにしますか」等問いかけて、自己決定できるよう働きかけている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	家に帰りたいなど、帰宅欲求が聞かれた際には、職員の都合ではなく、本人の希望を尊重してすぐに対応している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	家族の協力のもと整容道具をそろえたり、髪の毛を気にされる方には、鏡と櫛を用意し、自分で整容できるよう支援している。毎朝、起床時には髭剃りをしていた入居者には、その習慣を継続できるよう支援している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	毎日一緒に昼食の調理を行い、個々の能力に合わせた準備や後片付けを支援している。誕生日にはお誕生日メニューを用意して家族を迎えてホームでお祝いをしている。また、畑と一緒に育てた野菜を調理することもある。	夕食は同法人の給食センターから運ばれてきますが、朝食・昼食は各ユニットで手作りで。昼食の準備や後片付けは、利用者ができる範囲で職員と一緒にを行っています。訪問時に、男性利用者が「男やけどな」と言いながら楽しそうにちらし寿司を作っている様子を見ることができました。屋上の菜園で収穫した野菜で調理することもあります。	

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	毎日の食事摂取量の把握と毎月の体重測定により栄養の過不足がないよう支援している。水分摂取量の少ない入居者については、ケアプランに組み込んで確実に水分補給ができるよう工夫している。食事の摂取量が少ない時には、家族様に本人の好む物を依頼し、協力を得ながら摂取してもらっている。また、一人ひとり食べやすく本人に合った食事形態で提供している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	義歯を利用されている方には、外して嗽してもらうなど、個々に合わせた口腔ケアを行い清潔の保持に努めている。また、義歯洗浄剤の使用回数を家族と相談して支援している。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄チェック表をもとに一人ひとりの排泄パターンを把握し、行動を観察してトイレで排泄してもらっている。また、トイレの場所を理解できるよう工夫している。夜間、一人で排泄ができるよう居室にポータブルトイレを設置するなど工夫している。	トイレでの排泄を基本とし、本人の様子を観察することで排泄のタイミングを把握し、自立に繋げています。夜間でも場所がわかるようにトイレの灯りをつけて戸を開け放ち、一人で行きやすいようにしています。あとの確認は職員がすること、また部屋にポータブルを置くことで夜間排泄の維持をしています。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	スムーズな排泄のために、定時やそれ以外にも水分を摂ってもらうようにしている。散歩の機会を増やし運動を促すことで、便秘の解消に努めている。また、便秘気味の入居者には、薬だけに頼るのではなく、冷たい牛乳を摂取してもらっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴日は基本的には隔日で設定しているが、本人の希望や状態に合わせて、毎日入浴してもらうなど、柔軟に対応している。	2日に1回の入浴を基本としています。毎日入浴する利用者も複数人います。その日の入浴を好まない利用者には無理強いせず、ご飯やおやつの後という要望に応えたり、日を変える、着替えを促すなど、人や時間を変え、タイミングを図りながら対応しています。ホームの浴槽で対応困難な時は、併設のデイケアの機械浴を使うこともできます。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	日中は散歩や家事作業、余暇活動への参加を促し、夜間に安眠できるよう支援している。一人ひとりの体調に合わせて、日中にも臥床時間を設け、休息の支援もしてる。また、就寝前には他の入居者との交流の場を作り、楽しく穏やかに過ごしていただくことで、安眠に繋がるようにしてる。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	入居者一人ひとりが内服している薬の効果や副作用、注意事項など、いつでも確認できるようにしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	新聞を取りに行く、洗濯物を干すなど、一人ひとりに合わせて役割を持ってもらっている。また、散歩、塗り絵、日記を書く、新聞を読む、ボール遊び等の楽しみごとの支援を行っている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	その日の本人の気分や希望に応じて、季節を肌で感じてもらい活性化につながるよう、毎日散歩をしている。また、昨年までは近隣の店舗に買い物に出かけたり、季節の行事として花見などの外出や紅葉など家族と共にかけていたが、現在はコロナウイルスの感染予防対策として実施していない。	新型コロナウイルスで外出できない生活が続いていますが、季節や気候を感じられるように、1日1回は利用者全員が敷地内や屋上での散策に努めています。昨年までは、四季折々の外出や、自治会公民館でのふれあい喫茶や買い物等、外出の機会は多くありました。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	金銭は金銭出納帳で管理し、また、外出や買い物の時には、本人が支払いをできるように支援していたが、現在はコロナウイルスの感染予防対策として外出していないため、実施していない。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話をしたいとの要望があれば、家族に電話することで、不安お解消に繋げている。家族から連絡があった場合は本人に電話口で対応してもらっている。2名の入居者は携帯電話を持たれており、家族と話しているが、一人の方は、最近難しくなっており、職員介入し話しをされている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	各居室の玄関には自筆の表札を掲げて、居室を間違えないよう配慮している。また、窓の開放やロールカーテンの使用により、室温や光を調整している。1日3回温度と湿度をチェックして快適に過ごしていただけるよう支援している。またコロナウイルスの感染予防対策として1時間に1回換気行っている。	4ユニットから2ユニットに編成替えし、共有空間はゆったりと広く、外の景色を眺めながらお茶を楽しむことができます。居間には使い込んだ木製家具や椅子があり、利用者は好きなところで寛いでいます。ロールカーテンで、室温や光を調整しています。コロナウイルス感染予防対策として、1時間に1回の換気も実施しています。 2ユニット編成後のフロアの有効活用方法について検討中です。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	食事と団欒の場所を分けたり、デイルームのソファの配置を工夫して、入居者が自由に寛ぐことができる空間を提供している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	家族の協力のもと、居室にてテーブルや椅子、思い出の写真などを置いて、居心地よく過ごしていただいている。仏壇を置かれ、毎日勤行をされている方もいる。他にも安眠できるように使いなれた寝具を持って来てもらっている。	各居室入口には、利用者が手書きした表札が掛けられています。利用者が以前使っていた馴染みの家具や、大切にしている家族の写真、仏壇等を持ち込み、その人らしい居室作りを工夫しています。居室の温度も、快適に過ごせるよう常に注意しています。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	転倒リスクの高い入居者でもベッドや家具を家族と相談しながら配置し、できるだけ自室で自由に過ごしてもらえるよう支援しており、ケアプランにも組み込んでいる。夜間は、迷わずトイレに行くことができるよう、トイレの電気を点けておくなど工夫している。		